

センター語録

この4月から社会人になり、(財)京都市景観・まちづくりセンターが初めての職場となりました。現在は、主に、地域のまちづくりを支援する仕事に携わっています。

私自身、地域の活動に根ざしていないといわれる若い世代です。仕事などでまちづくりの活動に参加し、それぞれの地域の方々にお話を伺っていると、改めて、自分が地域の活動にはほとんど参加しておらず、地域についてほとんど何も知らないことに気づきました。

自分の住んでいる地域を見渡してみると、地域の宝ともいべき方々がたくさんおられることに気づきました。毎日、小学生たちに声を掛け集団登校を見守っていらっしゃるおじさん。私の通学時にもよくお世話になりました。また、杖をつくる名人もおられ、それぞれの人に合った形や素材で杖を作っている方がいます。先日、地蔵盆が終わった後、

「杖名人」にお話を伺う機会がありました。杖にこめた思いや、自分が亡くなった時には一緒にお棺に入れてほしいという家宝(?)の杖も見せてもらうことができました。地域の歴史などの話を聞くと、毎日通る道や神社、家の前を流れる川に、歴史上の人物が活動していたことが生き生きと感じとれ、今までと違う視点で見えるようになりました。

また、家の隣には地酒を造っている工場があります。そこで働く方とは、顔を合わせれば挨拶はしていますが、長年近くに住んでいるにも関わらず、工場でどんなことをされているか、中を見せてもらったことは一度もありませんでした。今年は地域の方々をお誘いして、見学ツアーをしようと企画しています。これからは、自分の地域を知ることにも目を向けていこうと思っています。

(景観・まちづくりセンター事務局 Y・N)



京まち工房



(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター
パートナーシップで進めるまちづくり



京都に、まちづくりの結晶が降り積もります。

「京都まちづくり交流博」

- [日時]** 平成14年2月17日(日) 午前10時~午後5時
- [場所]** キャンパスプラザ京都(京都市下京区西洞院通塩小路下る)
- [内容]** (1) 基調講演「パートナーシップのまちづくりとは」
京都府立大学 助教授 宗田好史氏
- (2) まちづくり発信
地域まちづくり活動の事例、パートナーシップによるまちづくりの事例及びモデル的な提案等の発信を、参加者が作成した作品で行います(67組の応募がありました)
- (3) まちづくりパネルディスカッション
3つの分科会を開催します。「まちづくり発信」で発信された方々を中心にパネラーとして迎えます。

京都では多くの地域で、活発なまちづくり活動が展開されています。市民、市民活動団体、NPO、学生、企業、行政等様々な方が、まちづくりに向けた多様な取組を展開しています。まちづくり活動が広がっていくには、様々な方が、お互いの立場と役割を理解すると共に、それぞれの役割分担のもとに責任を持って、力を合わせながら取り組む、パートナーシップのまちづくりとして進めることが求められます。

この度、センターでは、まちづくりに取り組む、あるいは取り組もうとしている様々な方が集い、それぞれのまちづくりに関する情報発信や交流、そして新しいパートナーとの出会いの場となる「京都まちづくり交流博」を開催します。多くの方に足をお運びいただき、パートナーシップによるまちづくりに向けた出会いを重ねていただきたいと思います。(ホームページでもご紹介しています。http://web.kyoto-inet.or.jp/org/kyoto-ws/)

センターからのお知らせ

新刊案内

景観・まちづくりシンポジウム「持続可能なまちづくりを考える!」の記録集ができました。(詳細は、6ページを参照)

賛助会員の募集(平成13年度分)

京都のまちづくりに貢献したい!センターの活動を応援したい!そんなあなたの熱意をお待ちしています。

[特典]

- ・ニュースレター(年4回・季刊)の送付
- ・ニュースレターでの活動紹介
- ・シンポジウム、セミナー等への優待

[年会費]

個人1口:5千円 団体1口:5万円

まちづくりフレンズの募集

地域のまちづくりに関する各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加していただける方を募集・登録しています。

京まち工房 ホームページ

<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/kyoto-ws/>

センターの取組内容をはじめ、まちづくりに関する様々な情報を発信するホームページ。皆さんからのまちづくり情報もお待ちしています。



(財)京都市景観・まちづくりセンター案内

〒604-0846
京都市中京区両替町通押小路下る金吹町452
(元京都市立龍池小学校内1階南側)

TEL 075-212-4031
(支援・参加・入づくり)

FAX 075-212-4047
e-mail: kyoto-ws@mbox.kyoto-inet.or.jp

相談の受付等
月~金(祝日を除く)の9:00~17:00
来所される場合はなるべく事前にお電話ください。
なお、駐車場はありませんので地下鉄等をご利用ください。



あなたのまちづくり拝見 梅津まちづくり委員会

住民主体のまちづくりを様々な視点から紹介するこのコーナー。今回は、地域の歴史や人、建物等の地域資源や地域課題等の情報を、まち歩きや学習会などの取組を通して共有するとともに、それらの取組を通じて築かれた信頼関係を基に、将来にわたって暮らしやすい魅力ある梅津学区の維持・発展を目指して、まちづくりの取組を行っている「梅津まちづくり委員会」を紹介します。

農村から、住宅や工場等の市街地へ

梅津学区は右京区の西端、概ね南西側を桂川、北側を四条通、東側を葛野西通に囲まれた東西に長い学区です。かつては、農地が広がる地域であり、保津川を下ってくる木材の港もありました。

高度経済成長期を迎える昭和30年代ごろから、農地は染色などの工場、宅地へとその姿を急激に変えていきました。近年は、こうした工場が閉鎖され、マンションや駐車場、建売住宅へと変わる姿が見受けられます。

梅津まちづくり委員会の発足

この地に移り住んで40数年、地域の自治活動の担い手として活躍してきた自治会連合会会長の大西さんは話されます。「本当に居心地のいい町だと思います。『梅津がいい』と、一度結婚して外に出ていた子どもが所帯を構え自分の子どもを連れて帰ってきてくれているんです。梅津学区は、自治会連合会等の自治組織による様々な取組を通じて、人のつながりが暖かい地域です。でも、四条通の違法駐車や、幅の狭い道路の安全確保等の課題とともに、子育てや教育、高齢者福祉等の将来のまちのあり方を考え、取り組まなければならない課題も少なくありません。梅津のいいところを次の世代に引き継ぎたい。高齢者や子どもにやさしいまちにしたいと思っています。そのため、従来の自治会等の組織とは違い、まちを良くしたいという思いを持つ人が個人の資格で自由に参加でき、息長くまちづくりに取り組んでいく組織を作っていく必要があると思いました。」

大西さんをはじめとする自治会連合会の役員の方々の思いが集まり、平成12年5月に自治会連合会の中に「梅津まちづくり委員会」は発足しました。

活動には、立命館大学の乾亨教授とそのゼミ生が頼もしい応援団として加わりました。

当初は「まちづくりは自治会連合会でやればいいのか？ 今でも忙しいのに、なぜ、別の組織を作る必要があるのか？」等の戸惑いや、「まちづくり」という言葉に対する定義や考え方の違い等が目立つこともありました。しかし、それらに対する答えは、その後の取組を通じて、少しずつ見えてくることとなります。



マップ・地図を使ってまちのことを説明

「まち歩き」の取組から得た 確かな手ごたえ

委員会の最初の取組は、平成12年5月の発足から約1ヶ月目の「まち歩き」の取組でした。初めての取組にも関わらず60名もの参加を得ました。

6班に分かれた住民は、古くから地域に住んでいる人を案内役に、今では姿を変えた子どもの頃の遊び場等の思い出話や、地域の歴史の話等を聞きながら、「いいところ」や「少し気になるところ」をメモやインスタント写真に残します。それらを集め、模造紙大の地図として作成し、参加者全員に発表しました。

「初めて地域にまつわる話を聞いた喜びの声」や、案内役の「喜んで話を聞いてもらった達成感」、そして参加者全員が感じた「自らの地域を再確認し、その魅力を共有した感動」は、確かな手ごたえを委員会にもたらしました。

その後、3回かけて地域全体を回りました。回を重ねるごとに、取組と委員会の存在は確実に地域に根ざしていきます。

地域の昔や歴史を知る取組

まち歩きの取組は、地域のまちづくりのテーマを浮かび上がらせてくれました。地図で発表すると最も盛り上がる話題が「地域の少し昔のことや、歴史のこと」。委員会では、それをテーマのひとつとして取り組むこととしました。

平成13年1月、「地域の歴史を語る会」は、地域の郷土史家の林さんが講師を引き受けました。教科書等にはない話との出会いは、地域の歴史をさらに身近なものとなりました。

また、江戸時代材木商を営み、多くの古文書等を所蔵されている林さんの家と、林さんご自身は地域の宝物として再確認されることとなりました。

歴史に関する取組は、その後も継続発展を目指しています。

委員会の取組や成果の発信

委員会では、地域の一人でも多くの人にまちづくりの取組を知ってもらい、参加してもらうために、情報を発信する取組を行ってきました。

平成13年2月に開催された右京感謝祭(区の交流イベント)においては、取組を通じて作成した地域の魅力満載の地図や、地域の歴史、まちづくり委員会の紹介と呼びかけ等に関するパネルを作成し、展示しました。

パネルの作成には、地域の画家や郷土史家など新しい人材も加わり、その後の委員会を支える担い手の輪も広がりました。

地域課題に関する情報を 幅広い住民と共有

平成13年初頭には、桂川に新しい橋を架け、学校の東側を北進する都市計画道路と、水害に備えた有栖川の改修という新たな地域課題が持ち上がりました。

「このような取組こそ委員会が責任をもって取り組むべきだ」「委員会ではこの問題は取り組むべきでない」等の様々な意見が出されました。

議論を積み重ねた結果、委員会では、それぞれの課題に対して、是非について結論は出さないが、情報量の違いによる誤解や行き違いが生じないよう、正確な情報を地域の多くの人と共有する取組を行うことを確認しました。

また、行政に対し「ものを申す」立場でなく、出来る限り行政の持つ情報も共有し、行政の役割と地域の主体者としての住民の役割を意識し、ともに力を合わせ地域の魅力の向上に向けて取り組んで行くことを確認しました。

それを受け、有栖川改修については、改修を期に有栖川を地域の宝物とする方向で取り組むこととし、委員会主催で京都市の担当部局や河川の専門家などを招いての説明会や学習会、まち歩きの取組を行っています。

広がった人の輪、培われた柔軟な発想と行動力

委員会では、平成13年10月、梅津大神宮社のお祭りと一緒に「梅津まちづくり交流祭」を開催しました。餅



梅津まちづくり委員会 委員長

中川義和さん

足元を見直して見ると、思っていた以上に、まちには資源がたくさんあることや、今まで知らなかった人が多くおられることがわかりました。それらのものや人が上手く活かされていければいいなと思っています。また、時々、集まってくる人の熱い思いに圧倒されることもあります。

まちづくりは、一人一人の命を大切に思う心が基本だと考えています。人づくりと、環境づくり、弱者支援の三本柱での取組を通じて、まちづくりの将来構想も見えてくればいいなと思っています。

つきや新鮮な野菜の販売、昔の遊び体験、綿菓子の出店等の多彩な取組を行うとともに、平成13年2月に作成した梅津の歴史パネルをさらに充実しました。また、有栖川改修に関するパネル等により、まちづくりに関する多様な情報の共有も図りました。

これまでにも、地域の住民の交流イベントを求める声がありました。しかし、何よりまちづくりの取組を通じて広がった人の輪と、柔軟な発想、行動力が、地域の資源を生かした、創意工夫に満ちたイベントをわずか一ヶ月余りで作り上げることを可能にしたようです。



写真や地図、絵などを使いわかり易く地域情報を発信

委員会のこれから

まちづくりの取組を始めて、約1年半。振り返ると様々な成果があったようです。

梅津のまちに誇りと愛着を持つ人、深めた人が着実に広がりました。委員会も地域に定着し、個人参加が増え、現在会員は90人を超えました。新しいリーダーの顔も増えてきました。梅津のまちに注目する人も増えてきました。取組を通じてそれぞれの住民は、梅津地域の担い手としての意識を高めていきます。自治会連合会等とは違う委員会の役割も少しずつ見えてきました。

委員会では、今後、福祉や教育の問題にも取り組んで行く予定です。また、まちの将来像を共有し、その実現に向けた取組を行うことも目指しています。

梅津の新しい宝物となった「梅津まちづくり委員会」により、梅津のまちはその魅力を少しずつ向上させていくようです。



梅津自治会連合会 会長

梅津まちづくり委員会 相談役 大西賢市さん

取組内容が、若い人に魅力的に映っているようで、既成の自治会連合会では掘り起こしにくい人が参加してくれています。その中から、地域のまちづくりの新しい担い手となる人も出てきています。

1年半経ち、まだまだ勉強不足な気がしますし、意識を変える取組が必要なのにも思います。また、まちづくりには、人の生き方や考え方も関わってくるので、今後は真剣に社会問題や人生観についても若い人も交えて話し合える場を持ちたいと思っています。

お知恵拝借~

滋賀県高島郡高島町 「ガリバーアクティブ 95 委員会」のまちづくり



琵琶湖の西岸に位置し、多くの自然に囲まれた農村地域であり、今や「ガリバーのまち」として名高い高島町。江戸時代には、大溝藩の城下町として栄え、かつての繁栄をしのばせる古い町並みや町割用水路などが残されています。今回は、そのようなまちで「ガリバーアクティブ 95 委員会」が行う「古い商家を活用したまちづくり」からお知恵を拝借するため、委員会代表の今西仁さんにお話を伺いました。

ガリバーアクティブ 95 委員会の設立

「築後150年を経過した、敷地面積約270坪の商家が取り壊される」という話が今西さんの耳に入ったのは、平成7年6月のことでした。その頃、建物の老朽化や後継者の問題に伴い、古い商家の空家問題、保存・継承問題が地域課題の一つとして浮上していました。また、昔からの地域であることもあって封建的な考え方もあり、家を人に貸すこと、売ることへの抵抗も見られ、新たな活用方法を探るには様々な課題がありました。「商店街を形作る一つの商家がなくなることによる町並みの破壊、それによる商店街の益々の衰退を何とか食い止められないか」。今西さんは強い思いを持っていたものの、様々な状況から個人で借りることは難しかったのですが、そのことが後に「ガリバーアクティブ95委員会」を設立するきっかけとなります。

そもそも20年程前から、今西さんから15名の有志が「高島町をよくしたい」という純粋な思いから「地域研究会」を結成し、月1万円の会費を活動費に様々な活動を行っていました。まちの実状を知るためのまち歩きから始め、先進事例学習、また、具体策の検討等、日夜議論を重ね、結果、高島町の活性化に向けた具体策として、様々なイベントを通じた地域住民の交流と地域資源を再認識する取組を行ってきました。同時に、そういった活動の過程で、夜中になることもしばしばというほど、とことん議論をすることで、メンバー間の意識の共有、信頼関係の構築が図られていたことも、後の活動に生かされることとなります。

商家を借り受けるため、今西さんの属する「地域研究会」と、空家の

活用方法等を検討していた高島町商工会の「高島町活性化委員会」(平成7年1月設立)とが共に考えていこうと話し合いを重ね、新しく「ガリバーアクティブ95委員会」を設立することになりました。そして、平成7年10月、空き家になっていた古い商家は、いよいよ同委員会により借り受けられ、保全と有効活用を具体化することになりました。

地域住民の活動、交流の拠点「びれっじ」の誕生



休日を返上し、メンバー自ら改修

賃貸借契約を締結後、「自分たちでできることは自分たちでやろう」と、改修技術を学びながら、屋根の改修、床張り、壁塗り、外構等、委員会のメンバー約20名が自らの手で、休日を返上し約半年掛けて改修にあたりました。また、総額約2600万の改修費用は、町から一部補助を受けたものの、大部分を銀行から融資を受け、メンバー自身が返済を行うなど、メンバーの志と熱意が強く感じられます。

この結果、昭和62年の「ガリバー旅行村」の完成以来高島町と交流のあるアイルランドの文化と、高島町の文化、そして両者から生まれる新しい文化を発信する拠点として、古い商家を改修した「びれっじ1号館」が平成8年4月に誕生しました。加えて、写真コンクール、音楽会、落語会等、様々なイベントも催され、地域の交流の場としても活用されています。

2号館、3号館、4号館など様々な広がりへ

その後、1号館の誕生に魅せられた商工会青年部が別の商家を自ら改修し、染色工房、ガラス工房、食事処として「びれっじ2号館」を完成させました。さらに、身体に障害を持つ方々の作品の展示、販売を行う3号館、地域の女性が運営するキャンドル工房の4号館と、広がりを見せています。

また、今では周辺の城下町の観光案内をする観光ボランティアが組織されたり、高島町に移り住みたいという人が現れるなど、地域住民の意識の高まりや内外の交流が活発になっています。

また、こういった活動の結果、「びれっじ」を訪れる人も完成当初の1万5千人から、今では年間約3万人と、着実に増え続けています。



びれっじ1号館

* * *

「まちづくりは、理屈や理論ではなく、自ら汗を流す実践から生まれるものだということを実感しました。これからは高島町のファンが内外問わず増えれば」と今西さん。

「出来ることから実践する」を合言葉に、温故知新の精神でわがまちの実情に根ざした住民の自発的な活動が、高島町に大きな変化をもたらすことになりました。

京町家の保全・再生の事例

~自然な暮らしとの出会い~

「手打ち蕎麦 かね井」 北区鞍馬口通智恵光院

戦国の世、応仁の大乱では西軍の陣地となった船岡山。以来、周辺一体は西陣と呼ばれる。その船岡山の麓、商店の並ぶ鞍馬口通を東へ歩くと、一際大きな暖簾が目に止まる。ガラス戸を滑らせ、手打ち蕎麦かね井を訪ねた。

築80年以上経つ、2階建の京町家。建てられたときは米屋だったらしく、店の間の土間が広い。靴を脱いで、床座で蕎麦をいただく。二間ある室内は、季節の草花で彩られている。ご主人の兼井俊生さんが蕎麦を打ち、奥さんの真由美さんが客を迎える。基本的には夫婦で、自分達だからできることをしていく。その空間を味わったお



客さんに、「ああ幸せ」「ああおいしかった、また来るわ」といってもらいたい。平成11年暮れの開店以来、その想いは変わらない。

「ああ、幸せやな。こんな美味しいもん食べられて」。今から9年ほど前、広告代理店で制作を担当していたご主人は、今までにない蕎麦との衝撃的な出会いを経験する。以来、仕事の傍ら趣味で蕎麦を打ち始めた。ものづくりが大好きなご主人。仕事が機械化し、手づくり感が薄れていくのを感じていた頃でもあった。自分の手でものをつかって、人に喜んでもらえるのが面白い。自分自身が得たあの感動を、他の人にも感じてもらいたい。家族には、その想いを少しずつ伝えていった。「お父さんは蕎麦屋になろうと思うけどどう思う?」家族でたくさん話し合った。

関西出身の2人は、関西方面で店を構えることにした。木造の民家がいい。自分たちでいろんな風に使うことができる空間を求めた。まだ幼い子どものためにも、店をしながら暮らせるというのも条件だった。1年近く探していた



が、なかなか見つからない。平成11年夏、町家倶楽部の新聞記事に出会う。古い町家にいろんなものづくりをする人が集まっていると知り、早速訪ねていった。借りたい

町家が見つかる。もう、時間的にも後がない。希望者が殺到する中、大家さんとお見合いが実現した。「この人になら貸してもいい」。双方の想いが一致した。「あんたが嫌になるまで」と、無期限で借り受けることになった。

大家さんから「好きなように改修したらいい」とも言われる。大工さんと二人三脚で工事を進めていった。何重にもベニヤ板の貼られた壁や天井を剥がすと、太い梁が見えた。「ほんもの」だ。家の傾きがひどい。傾きを直すため、柱をジャッキアップするという。驚いたことに家が持ち上がる。1階は店、2階は住まいとした。同時に借りた隣の家は、作業場と倉庫にした。

木や土。自然の素材に囲まれ、暑さ寒さを感じる。暖かい春、涼やかな秋が「待ち遠しい」という感覚。これまで空調管理された室内で生活してきた身には新鮮だった。これが「自然」であり、「普通」の暮らしだと気がつく。

「直しながら暮らしながら直しながら、暮らしすんやな」「暑くて、寒くて、困ったことがあって。これが普通なんですよ」と真由美さんは言う。不満もいっぱいある。楽しいこともいっぱいある。それがいい。不便なこと、困ったこと、いろいろな問題を、どうしようか、と考えながら暮らす。それが面白い。

子ども達にも新鮮だった。昼と夕方の営業時間は、店に寄り付けない。夜は真っ暗な店を通り、トイレに行かないといけな。家の中に「怖い」場所、「行ってはいけない」場所ができた。親の仕事をする背中を見て育ち、自然と自分たちの役割を覚える。雨が降り始めると洗濯物を取り込んだり、「宿題した?」と声をかけたり。まだ小さな弟や妹を、長女が面倒を見る。子どもは子どもなりに、暮らしと向かい合う。

大家さんとの出会い、町家倶楽部の事務局の人々、アーティストや店主、大工さんとの出会い、そしてお客さんとの出会い。それぞれが呼び合い、出会いが重なった。何よりもそのつながりを得られたことが素晴らしい。ときには自身と重ねあわせ、勇気づけられもした。近所にも応援してくれる人がいる。こんなに心強いことはない。

責任を持ち、自由に生きる。こういう生き方をしようと思っただけのこと。家族、仕事、家、ひと、まち、そして自分自身と向き合う、職住一致の暮らしがここにある。



町家倶楽部：町家という空間を必要とする人、町と町家に魅力を感じる人と町の縁結びをする仲人として、京町家を工房、住居等に活用したい人達と家主さんをつなぐ活動を行っている市民活動団体。(ニュースレター8号で紹介)

景観・まちづくりシンポジウム 「持続可能なまちづくりを考える！」 を開催しました

まちづくりを継続するには、まちづくりへの主体的な参加を通して、自らの生活や地域全体が豊かになること、そしてそのプロセスそのものが楽しいものであることが求められると思われまふ。「地域や自分が豊かになるまちづくり」「参加して楽しいまちづくり」そして「継続するまちづくり」とはどのようなものなのでしょう。

また、京都には様々な主体(地域住民、市民団体、企業、NPO、行政その他)による、活発なまちづくり活動が展開されています。今後は、それぞれのまちづくり活動を継続させることに加えて、それぞれの思いや取組の相互理解を深め、パートナーシップを構築して、共に発展していくことがますます大切になると考えられます。

そこで今回の景観・まちづくりシンポジウムでは、スポーツ・コミュニティに関する「基調講演」及び参加者全員が参加する「意見交流」を通して、継続するまちづくり、そして発展を続けるまちづくりという意味での「持続可能なまちづくり」について、皆さんと一緒に考えることを目的に開催しました。

スポーツもまちづくりも、目標を定めて楽しみながら取り組むことが大事。

「基調講演」では、特定非営利活動法人スポーツ・コミュニティ・アンド・インテリジェンス機構(略称SCIX)理事長で神戸製鋼ラグビー部ゼネラルマネージャーである平尾誠二氏をお招きし、地域を単位としたまちづくり活動の可能性、まちづくりに参加する動機、人づくりに関して、ご自身のスポーツ活動を通して得られた経験を交えながらアドバイスを受けました。

「まちづくりには人づくりが重要だが、その人づくりにスポーツは有用がある」「スポーツは、物事を進める際に必要な『創造性』を育む有用がある」「地域社会は、人を育てる機能がある。その機能を醸成させるのに、スポーツは有効である」「ス



4色の色紙を使って旗上げゲームをしました

ポーツにしろまちづくりにしろ、継続するには『楽しい』『主体的に取り組む』『自分で目標を設定することが大事』ということ、子どもの頃の経験を交えながら、お話しいただきました。

講演を通じて、「まちづくりに参加する動機は身近なものからで、楽



基調講演で話される平尾誠二さん

しく、そして負担や義務感のない参加が、まちづくりを継続させるので、向上にもつながること」そして「まちづくり活動は、奉仕的な活動だけではなく、自分も楽しく活動できるもの」「多くの人々の理解を得ながら進めることが大事」等について、ご教示いただきました。

パートナーシップで進める、持続可能なまちづくり

「意見交流」では、京都府立大学の宗田好史助教授をコーディネーターとしてお迎えし、旗揚げゲームにより会場の参加者の皆さんとの意見交換を活発に行いました。「基調講演」で受けたお話が、京都におけるまちづくりを展開する際に、どのように生かすことができるかを考えるために、参加者のまちづくりへの思い等について設問に答えていただき、持続するまちづくりの条件、パートナーシップの必要性についての意見交流を行いました。

最後に、宗田氏から「まちづくりは『これが正しい』という理論だけで進めるのではなく、いろんな価値観を持った、人それぞれの夢や目標を統合させながら、まちづくりの目標、まちの将来像を描き、肩の力を抜いて楽しみながら、自分たちの取組を広く発信して応援してくれる人を増やしながらか進めることが大事で、このような取組が、持続するまちづくりとなるのだろう」「まちづくりをより魅力的にするには、新しいパートナーの参画や様々な人との交流、パートナーシップのまちづくりが有効」ということが大切な論点となることが示され、会場の皆さんと共有しました。



宗田助教授のコーディネートによる意見交流の様子

プログラム

日時：平成13年10月9日(火)午後6時~8時半

場所：元京都市立龍池小学校 2階講堂

基調講演：「地域を結ぶ、スポーツ・コミュニティ」

平尾 誠二氏(特定非営利活動法人スポーツ・コミュニティ・アンド・インテリジェンス機構理事長、神戸製鋼ラグビー部ゼネラルマネージャー)

意見交流：「ひと・もの・情報の交流から生まれ、育つ私たちのまちづくり」

宗田 好史氏(京都府立大学人間環境学部 助教授)

なお、シンポジウムの記録集は、センターにて配布(無料)しています。郵送をご希望の方は、120円分の切手とあて先を明記したものを同封の上、センターまで送付してください。

京町家なんでも相談

京町家の維持・継承に伴う悩みや不安を少しでも解消し、京町家の保全・再生を促進するため、センターでは、平成13年9月から「京町家なんでも相談」を実施しています。(ニュースレター16号参照)

9月1日には、「京町家を支える環境づくりに向けて」と題して、景観・まちづくりシンポジウムを開催しました。京町家の保全・再生に取り組まれている市民活動団体の皆さんと、大工、不動産事業者等の職能団体の皆さんから、京町家の維持・継承を支える様々な取組をご紹介いただくとともに、センターの「京町家なんでも相談」をお知らせしました。シンポジウムでは、京町家を現代に引き継ぐ環境づくりについて、また、京町家の保全・再生による魅力あるまちづくりについて一緒に考え、京町家の維持・継承に関わる様々な方々の相互の連携が大切であることが語られました。



「景観・まちづくりシンポジウム」の様子

「京町家なんでも相談」の開始以来、京町家に関する様々な相談は、12月半ばで、180件を数えています。京町家にお

住まいの方々、京町家をお持ちの方々から、「改修を考えているのだけれど」「何かに活用できないか?」といった内容をはじめ、様々なご相談が寄せられています。

また、毎月第2木曜日には、京町家に関する専門的な相談に京町家専門相談員(不動産事業者、大工・工務店、



「京町家再生セミナー」の様子

建築士)が応じる「京町家専門相談」を実施しています。

併せて、偶数月には、京町家にお住まいの方、京町家をお持ちの方を対象にして、京町家の活用・改修の可能性や有効性について学ぶ、「京町家再生セミナー」を開催しています。これまでに、「京町家の賃貸借を事例・経験から学ぶ(10/11開催)」「定期借家制度と京町家の活用(12/13開催)」と題して、経験者や専門家を講師に迎えて実施しました。(次回は2/14、「大工さんに学ぶ改修の考え方」を、よしやまの町家(上京区葎屋町通下立売下)にて開催予定。)

どうぞ、ご活用ください。

この夏、当センターにインターンシップの学生さんが来られました。1ヶ月の期間を終えての感想を語っていただきました。

インターンシップ実習を通して気づいたこと

立命館大学産業社会学部 都市・生活コース
阪本真紗子



私は8月中旬から9月中旬までの1ヶ月間、京都市景観・まちづくりセンターでインターンシップ実習をしました。インターンシップというのは一種の就業体験のようなもので、

実際に仕事の現場に身を置き、課題に取り組むというものです。1ヶ月という期間の中で、「住民主体のまちづくりにどのような支援が必要とされるか」という課題が与えられました。課題に取り組むにあたり様々なアドバイスをセンター職員の方に頂きましたが、それらを参考にするうちに、いつも気になったのは私が住む学区のことでした。

まちづくりで有名な地区は日本全国に多くあります。しかし、いつも振り返ると「そういえば私の学区にはどんな人が住み、どんな暮らしをしているのかほとんど知らないなあ」ということを思うのです。

そして、私は自分の住む学区の地図を広げ、学区に住む方にヒアリングを行うことを決めました。お話を伺ううちに、自分が小さいころから生まれ育った学区に興味や愛着ができました。小学校まで通った道のり、いつも声を掛けてくれるおじさん、日が暮れるまで遊んだ公園など、実は、多くの地域の人に囲まれて育ち、たくさんのすてきな思い出が詰まっていることに気づきました。「自分の地域に愛着を持つ」そのことこそがまちづくりのための大切な思いのひとつではないでしょうか。

『まちづくり交流』

～パートナーシップによる地域清掃～ 「イオン・デー」の取組

企業の社会的な役割が見直される中、企業と住民とのパートナーシップによるまちづくりの取組が、様々な形で広がっていくことが期待されます。

今回は、社名変更にともない、社会貢献の活動を充実し、住民や行政とのパートナーシップにより取り組んでいるジャスコ洛南店の「イオン・デー」の取組を紹介します。



住民、企業、行政のパートナーシップによる地域清掃

企業理念として、環境保全や社会貢献等に取り組んでいるイオン(株)では、平成13年8月、ジャスコ(株)からの社名変更を機に、毎月11日を「イオン・デー」と位置付け、それまでの取組をさらに充実することとなりました。具体的な取組方法は各店舗に委ねられています。

ジャスコ洛南店では、地域の住民との協働による清掃活動に取り組むことを計画。それまでに広報紙の発行について協力の要請を受け、そのまちづくりに対する思いに共鳴していた「西大路駅周辺まちづくりフォーラム」に「イオン・デー」への協力を呼びかけました。

「西大路駅周辺まちづくりフォーラム」は、平成12年6月に発足。自治連合会等の地域住民や企業、行政とのパートナーシップにより様々なまちづくりの取組を実施しています。今回の呼びかけに対しても、「西大

路駅周辺まちづくりフォーラム」がつながりのあるところに呼びかけることにより取組の輪は更に広がりました。

平成13年10月11日の「イオン・デー」は、ジャスコ洛南店から従業員約330名、唐橋、祥豊、吉祥院の自治連合会や女性会等の様々な住民団体からは約50名、地域の企業(株ワコール) 行政(南区役所、南まち美化事務所等)から職員約10名と清掃車2台が参加する幅広い取組となりました。

取組を通じて芽生えた信頼関係や連帯感、これから後のまちづくりに繋がるのが期待できます。

「イオン・デー」の取組は、その後も規模は少し縮小しますが毎月11日、継続的に取り組まれています。

黄色いレシートの1%を社会還元

イオン(株)では、地域に貢献するもうひとつの取組を始めました。毎月

11日だけに発行する黄色いレシートを、地域のボランティア団体名等が書かれたBOXへ投函。その1%分の金額に相当する物品をジャスコの各店を通じて提供するという仕組みです。BOXには、各団体の活動内容が記載されており、賛同する団体を支援することができます。

今は、福祉ボランティア等の5団体の登録ですが、30団体まで受け付ける予定です。

地域との共存共栄を意識し、地域住民の暮らしの充実、地域の魅力の向上を目指した企業のまちづくりへの貢献が、様々な形で広がり、住民、行政とのパートナーシップによるまちづくりが充実していくことが期待されます。



お話を伺った奥村副店長によるBOXの紹介

京のまちの今昔物語

昭和10年に市電が開通しました。これらの写真を見ると、昭和のはじめから現代までの大宮通の変遷がわかります。
撮影場所：九条大宮の交差点を北側から撮影(協力者：大菅 直さん、白木 正俊さん)



昭和4～6年頃?



昭和10年以降



平成13年

「京のまちの今昔物語」では、皆さんがお持ちの昔の写真から、現在の京都について考えられたらと思います。皆さんのお宅のアルバムに、かつての京都をしのぶ古い写真がありましたら、是非お貸しください。

まちづくり提案

「建売り町家設計コンペ」の取組

今回は、周囲の町並みに調和した新しい町家の創造と、建築の学生に現場を学ぶ機会の創出を目指し、「京都建築青年経済協議会」によって取り組まれた「建売り町家設計コンペ」の取組を紹介します。



最優秀賞を受賞した学生グループと作品「トオリニワ」の模型

「京都建築青年経済協議会」とは

「建売り町家設計コンペ」を主催した「京都建築青年経済協議会」は、工務店や水道、電気工事業者等、京都を拠点に建築の現場に関わる方々によって、平成11年9月に設立され、現在32人の会員がおられます。自分たちの仕事に関わる法律や経営について正確な情報を知り、実務に結び付けていくために、会員同士が学び、情報交流することを目的としています。

「建売り町家設計コンペ」のきっかけ

会では、平成13年6月から、「建売り町家設計コンペ」の取組を行っています。

取組のきっかけは、京都市内の建築専門学校から、「建築を学ぶ学生は、実際の現場を知らないことが多い」という依頼があったことです。会で話し合い、「建売住宅は、住宅供給の手法としては大きな比重を占めるものの、その特殊な敷地や形態での構造や施工について学んだことのある学生はほとんどいない」という現状と、「現在建てられているものの中には質の確保が十分に図られていないものもある」という日頃の思いから、学生に良質な建売住宅の建て方を学んでもらう場にすることを決めました。

取組を通じて広がったつながり

京都で建築するというところで、新しい町家の計画を考えていたところ、不動産会社「三信工務店」から、京町家の多い西陣で、土地の提供を受

けました。

設計の条件として、「木造3階建て」「いぶし瓦を使用」「オール電化住宅」とすること等が設定され、取組に共感した瓦業者、電力、電器会社など様々な企業が協力しました。コンペの審査をはじめ、全体の監修には、長年京都で活動してきた建築家の若林広幸さんが協力します。



審査員(一番右が会の理事長の長谷川さん)

「建売り町家」の建築

平成13年6月に行われた現場見学会と事前説明会には、会場に入りきれないほどの人が詰め掛け、421件の登録申し込みがあるなど、非常に注目度の高い取組となりました。平成13年7月に行われた審査の結果、「敷地内の3軒の住宅の間に共用の『通り庭』を持っており、住人が住まいながら、ここで互いの関係を築いていくことを目指す」という作品を提案した大阪工業大学の学生グループが、最優秀賞を受賞しました。学生のグループは、審査委員長を担



現場の監理を行う学生

当した建築家の若林さんとともに、詳細の計画を検討し、設計図を完成させ、現場の監理にあたっています。施工は会員が請け負っており、平成13年9月から、京都の地場の材料を使っでの建設が進められています。平成13年12月までに完成する予定になっています。

今後の展望

会の理事長の長谷川直浩さんは、「京都で周囲の町並みに調和したものを、自分たちの手で作り出していけるということにとっても意義を感じています。今後、このようなコンペには定期的に取り組んでいきたい」と語ります。すでに、第2回目のコンペの公募が、平成14年4月1日にスタートすることが決まっています。関西電力特別賞を用意し、学生の斬新な提案に期待を寄せていた関西電力(株)の問屋律夫さんは、「今回の最優秀賞受賞作品の『交流することを目指す』という考え方に期待しています。こういった取組を継続していくことで地域が活性化し、京都の都心がより魅力的になれば」と今後の会の取組への期待をふくらませます。

京都の地域資源や人的資源を生かしながら取り組まれた「建売り町家設計コンペ」。この取組を通じて育まれた「京都建築青年経済協議会」と様々な企業等とのつながりや、ここで成長した学生が、今後の京都にもたらす効果が楽しみです。

お問合せ先
〒600-8433
京都市下京区繁昌町295-1 京都1号館704号
TEL: 075-342-2389 FAX: 075-344-0301
URL: <http://www.hal-kyoto.com/seinen>
E-mail: seinen@hal-kyoto.com

ニュービジネスの動向

このコーナーは、新しく立ち上がった、もしくは企画段階にある新発想のビジネスの動向についてのインタビューによる紹介です。



京都ベンチャーネット合資会社

京パレ代表 片岡 弘昭氏

設立の経過と事業内容をお教えてください

京都の中小、零細の起業家、ベンチャー企業を支援することを目的に、平成13年4月に会社を設立し、毎月1回京都異業種交流会「京パレ」を開催するとともに、インターネットを活用した情報発信を行っています。

会計事務所が母体としてあるのですが、その顧客の多くは中小、零細の企業で、そういう所はITやマーケティングなど、税務会計以外のことも税理士に聞いてもらえることが多くありました。このため、京都の動き、経済の動き、他の企業の動きなどの情報を収集していました。また、顧客から、新しく事業展開を図るとき、いろんな企業との出会いの場が欲しいという要望があり、税務会計以外の要望に応える付加価値として、インターネットを使った情報交流のようなものを始めたのがきっかけです。

しかし、いくらネットで情報を流しても、情報が氾濫している現在、なかなかそれが伝わりません。また伝わったとしても、京都は良くも悪くも保守的なところがあり、最後は人と人が対面して話をしないとまくいけません。そこで、実際に人と人が自由に交流できる場を作ったのです。

異業種交流といえば

他にもいろいろあると思うのですが?

はい、こうした異業種交流会は既に数多くあります。しかし、こうした交流会は特に20代後半から30代の若い年代に需要があるにも関わらず、若い人が参加しやすいものではありませんでした。また、もともとは様々な人や業種に参加していただいて、自分達が切磋琢磨することを目的とされていたと思うのですが、ある程度の人数が集まると閉鎖的な会となり、新しい人が参加しにくくなっていたりと、まったくの自由な交流会で、しかも比較的若い年代の企業家が集まりやすい異業種交流会はほとんどなかったのです。

「合資会社」とは? あまり聞きなれない言葉ですね

合資会社とは、それぞれ1名以上の無限社員と有限社員からなる法人で、資本金も1円から設立できます。なぜ合資会社を選んだかという、一つは資本金の壁

がないこと。もう一つは、行政等が行う支援では手の届かない層の起業家に対する支援をしたいと思っていますが、そうした方よりも「低い目線から見ていますよ」、「敷居は高くないですよ」というイメージを出したかったことです。そのため、あえて合資会社という形態を選択しました。



異業種交流会の様子

今後の抱負をお聞かせください

交流会の規模を拡大しようとは思っていません。東京などではいい先生をお呼びして、何百人も集める交流会があるようですが、京都はニーズがまったく違いますし、参加者同士が個別に交流できない程の人を集めても意味がありません。現在二、三十人の参加者で開催していますが、この規模を維持し、毎月京都のどこかで継続してやっていくことが大事だと思っています。

それから、京都にはせっかく面白い企業が集まっているのですから、行政も含めた、何か面白い提案ができないかと思っています。

私は生まれも育ちも西陣ですが、京都からはいろいろと恩恵を受けてきました。その恩返しをする意味でも京都にこだわってやっています。

京都はすごくいいところで、大きな可能性を秘めています。IT技術などの先端技術と、伝統産業などの昔からの優れた技術とが融合しないと、京都で起業する意味がないと思うし、それこそが京都の強みであると思います。1社1社は小さくても、アイデアを持ち寄り、強み弱みを補い合うことで何かできると思います。京都経済の発展のため、微力ながらも何かお手伝いできればと考えています。



お問合せ先
〒602-8066 京都市上京区中売通堀川東入東橋詰町72-1
ホワイトハウス2F
TEL: 075-417-4465 FAX: 075-417-4335
URL: <http://www.kyoto-venture.net>
E-mail: info@kyoto-venture.net

私と京都



能楽金剛流宗家夫人
金剛 育子

古き伝統と新しい試み

京都に移り住んでから早三十余年の月日が流れた。住まいが鴨川上流近くなので、毎日のように“加茂街道”と呼ばれる鴨川沿いの並木道を車で走るが、この街道は四季折々の眺めが実に素晴らしく、ここを通る時はいつも京都に住んでいて良かつ

たな、と実感する。京都の長い歴史に比べ私などはただかかだか京都在住三十余年の住民でしかないが、最近特に京都の町で思うことは、京都には心を洗われるような美しい場所が多く存在するが、またその一方で町の美観には無関心なような建物や老朽化した建物も増えてきていて、美しいとは言えないような町並や景観が多く目につくということである。

私共能楽金剛流の本拠地である金剛能楽堂は、百三十余年の歳月を経、久しい以前よりその著しい老朽化による倒壊の危険性が指摘されていたが、近年肉眼でもはっきりと分かる舞台の柱の歪みや、観客席の天井を支える鉄柱の傾きなどが年々顕著となり、建物全体が室町通りへ傾いていて老朽化による危険度はもはや放置できないレベルに達していることが専門家の調査により判明した。その為現地で建て替えを検討、交渉を重ねてきたが、土地の形状上、現行の法規制のなかではその実現が叶わず、様々な方々のお力添えを得ながら此の度新しい土地に旧舞台を移築して新能楽堂を建設する計画を進めているところである。旧能楽堂のままで放置しておいて観客の身に万

一の事故が起きた場合、一体誰がどうやって責任を取れるのかという人命にかかわる事柄であるのだが、一方ではこの移転計画には古くからの由緒ある建物に手を掛けることなどけしからぬことであるという反対が身内の内外を問わず根強く、計画の推進には難航を極めた。

後世までそのままの形でしっかり保存し守っていくべきものと、更なる可能性を求めて時代の変遷と共に人々と共生する為に変えていくべきものと、両者をしっかりと区別して見極めていくことが今の京都にとってとても大切なことのように思える。

かつての京都は、古き伝統と思いついた新しい試みの両面を兼ね備え、時代の先駆けとなったていたと聞く。

近年の京都がその地盤沈下を憂い、日本の都市の中でも元気の無い都市とされてしまっているとすれば、私達京都に住む者は謙虚にその現実を受け止め、魅力ある京都の再生の為に、活力ある先人の心意気を今一度思い起こさねばなるまい。

《センター解説アワー》

サステナブル・コミュニティとまちづくり

「サステナブル・コミュニティ sustainable community」とは、「持続可能な地域社会」と訳すことができます。この言葉の定義は様々にされており、そして様々な論点で検討が重ねられています。

定義の考え方は大きく2通りで、自動車交通の抑制や生物の多様性の確保等、環境的な配慮からの持続性を唱うものと、社会活動等の持続性を唱うものに大別できます。どちらの論点も、アメリカをはじめとして多くの地域で取組が進められており、その多くは、新しい都市づくりの中において、実践されています。

一方、京都は1200年もの間継続している世界でも数少ないまちです。時と共に社会システムや経済状況が大きく変わりながらも、それぞれの時代において、京町家の建て方に代表されるように、より豊かな生活を営むための個人活動と、社会(地域)全体が豊かであるための規制を共存させること

が受け継がれてきました。そして自助・共助・公助の共存の社会構造が具現化されているまちであるといえます。いつの時代においても、人と社会との関わりでまちが形成されてきたといえるのではないのでしょうか。

これからのまちづくりは、各人の自己決定・自己責任による主体的な参画の下、地域や社会との価値の共有を図り、パートナーシップにより進めることが大切であるといえます。そして、それらは京都に受け継がれてきたことであり、京都のまちづくりでは昔から実践されてきたことでもあるようです。

つまり、京都らしい「サステナブルなまちづくり」として、パートナーシップのまちづくりを進めていくことが、京都における「サステナブル・コミュニティ」の実現の方法といえるのではないのでしょうか。